京大東アジアセンターニュースレター　第 495 号

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター　2013 年 11 月 25 日

目次

==========

○　東アジア人材採用のための会社説明会のお知らせ
○　自動車シンポジウムのお知らせ
○　講演会のお知らせ
○　続・多国籍中小企業奮戦記　：　バングラデシュ編
○　ベトナム縫製工場視察　雑記
○　上海街角インタビュー　⑦
○【中国経済最新統計】

東アジア人材採用のための会社説明会

日時:2013 年 12 月 4 日(水) 11 時～15 時

会場:みずほホール(法経東館地下)

この度,京都大学東アジア経済研究センターでは,「東アジア人材」採用のための会社説明会を 2013 年 12 月 4 日、京都大学経済学部みずほホールにて開催することとなりました。「東アジア人材」とは,近年急速に経済成長を果たしている東アジア地域において活躍できる人材となる可能性のある学生(院生)を意味しております。こうした東アジア人材の採用を目的として,東アジア経済研究センター協力会の法人会員に会社説明を本学で行っていただきます。

1. 参加資格

①2014 年 3 月に大学(または大学院)を卒業(修了)見込みの方

②東アジア地域出身の留学生、または東アジア地域に強い関心があり、現地語を理解する能力のある日本人等

2. 参加方法

①参加希望者は、下記の申込先に，事前に所属、氏名を連絡してください。ただし事前連絡のない場合でも参加は可能です。

②希望する会社（複数可能）の説明会が始まる 5 分前までに会場横の廊下に集合ください。

③履歴書は、参加を希望する会社数分を御用意ください。

3. 募集要項

http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~shanghai/131204%20setsumeikai/131204%20setsumeikai.html

各社の募集要項は経済学部ホームページ内の「東アジア経済研究センター」に各社の募集要項を掲示しています。

4. 申込先

京都大学大学院経済学研究付属東アジア経済研究センター　℡075-753-3469

E-mail shanghai@econ.kyoto-u.ac.jp

月日	会社名
2013 年 12 月 4 日(水) 11 時～15 時	三井住友海上火災保険株式会社
	プレミアファイナンシャルサービス株式会社
	大和ハウス工業株式会社
	株式会社エクセディ
	DMG 森精機株式会社
	株式会社ワイ・デー・ケー
	SMBC 日興証券株式会社
	京セラ株式会社
	三社電機株式会社

****

主催

京都大学東アジア経済研究センター

共催

東京大学ものづくり経営研究センター

後援

京都大学東アジア経済研究センター協力会

アジア自動車シンポジウム

黎明期のミャンマー自動車市場

―進出すべきか否か, その判断基準を考える―

■京都会場　2013 年 12 月 7 日(土) 13 時
京都大学百周年時計台記念館 2 階国際交流ホール

■東京会場　2013 年 12 月 9 日(月) 13 時
京都大学東京オフィス(品川インターシティA棟 27 階)

総合司会

13:00-13:30
挨拶　京都大学大学院経済学研究科長 植田和弘

13:30-14:30
京都大学大学院経済学研究科 教授　塩地 洋　日系企業から見たミャンマー自動車産業(仮題 以下同)

14:30-15:00
鹿児島県立短期大学 講師　山本 肇　自動車産業－政策･発展史･今後の展望

15:15-15:45
事業創造大学院大学 教授　富山 栄子　輸入規制を受けている新車市場

15:45-16:15

住友商事 自動車リテイルファイナンス事業部　木村 将裕　金融事情と販売金融現況

16:15-16:45
慶應大学経済学部 准教授　三嶋 恒平　オートバイ流通の実態

16:55-17:00
閉会挨拶

17:15-18:45
懇親会　参加費 2000 円（協力会会員は無料）
司会 京都大学経済学部特任教授/東アジア経済研究センター協力会理事 宇野輝
開会挨拶 京都大学東アジア経済研究副センター長/京都大学経済学部准教授 矢野剛
閉会挨拶 京都大学東アジア経済研究センター協力会長/京都大学経済学部名誉フェロー 大森經徳

参加の御申込は，塩地 shioji@econ.kyoto-u.ac.jp に会場名，氏名・所属，懇親会出欠を御連絡ください。
東京会場は定員100名，京都会場300名です。お早めにお申し込みください。

****

講演会のお知らせ

主催：京都大学東アジア経済研究センター
後援：京都大学東アジア経済研究センター協力会

『中国経済成長モデルとその転換への挑戦』
（”中国增长模式与转型挑战”）

講師　中国人民大学経済学院教授　陶　然

司会：矢野剛（京都大学経済学研究科准教授）

日時：2013 年 12 月 3 日（火）　PM 4:30-6:00
場所：京都大学法経五番教室
使用言語：中国語－日本語 逐次通訳（同時通訳ではありません）

****

続・多国籍中小企業奮戦記 ： バングラデシュ編

18. NOV. 13
中小企業家同友会アジア情報センター代表
東アジアセンター外部研究員（協力会副会長）
小島正憲

ダッカの病院に緊急入院 ― 「好事魔多し」

ダッカの工場の連休中、私は日本に帰国していたが、一刻も早くダッカの工場の現場に戻りたかった。

しかしひとまず体調を整えておこうと考え、掛かり付けの病院に行って、いつもの高血圧や糖尿病の薬をもらった。病院で血圧を測ったとき、160／100と少し高めであり、医師から「あまり無理をしないように」と言われた。それでもその程度のことはいつものことであり、特別、気にも留めなかった。また数日前に軽いめまいを感じたが、すぐに治ったので忘れてしまっていた。とにかく心は、あの「感激の花束」の現場に、飛んで行ってしまっていた。

2012年11月3日朝、私はダッカの宿舎で目を覚ました。そのとき、一瞬、めまいがしたがすぐに治った。

その日は連休明けの初日だったので、私は張り切って、いつもより15分ほど早く工場へ入った。しかしながら、私の期待とは裏腹に、午前8時の始業時間になっても従業員さんはちらほらとしか姿を現さなかった。15分ほど過ぎてやっと30％ほどの出勤となったが、11時になっても40％ほどだった。私の「感激の花束」の班も、出勤者が少なく、とても仕事が流せる状態ではなかった。私は予想外の事態に、びっくりした。

そのときわが息子は香港で接客中であり、工場現場には不在だった。すぐに電話をかけてその状態を報告すると、わが息子は、「連休明けの午前中は、いつもそんなもんだ。午後には全従業員さんが揃う。心配はいらない」と言う。そこで人事部長にも聞いてみたが、同じ答えだった。工場を改善しようと勢い込んでいた私は、肩すかしを食らったよう気がして、少しがっかりした。また午後になれば本当に全従業員さんが出勤するかどうかも不安だった。それは、これまでの人生で人手不足に悩まされ続けてきた私のしがない習性でもあった。

私はそんなストレスを抱えながら、昼ご飯を済ませ、ひとまず宿舎の自室に戻った。そして昼寝する前に、メールのチェックをしておこうと思い、パソコンの画面に目をやった。そのとき急にめまいが襲ってきた。私は20年ほど前の冬場に、中国の黄石市の工場現場で、めまいで倒れたことがある。そのときは血圧が200以上であり、ただちに入院をした。また15年ほど前にも、中国の他の工場で、これまたひどいめまいに襲われ倒れた。そのときの診断はメヌエル氏病だった。私は今回も、そのいずれかだろうと思い、どちらも死に結び付くほどの病気ではなかったので、慌てず、とにかくベッドに横になった。

しかしめまいは一向におさまらず、そのうちに激しい吐き気が襲ってきた。私はトイレに行き、便器にしがみついた。そしてそのまま、嘔吐とめまいで、便器から離れることができなくなってしまった。そのとき私の頭を、ひょっとすると高血圧やメヌエル氏病ではないかもしれないという思いがよぎった。とにかく携帯電話のところまで這っていき、通訳のＫくんに助けを求めた。すぐに日本人技術者のＷさんが駆けつけてくれた。その後私は便器にしがみついたまま、工場の看護士さんに来てもらって、血圧を測ってもらったが、140／90でめまいが出るほどの血圧ではないことがわかった。看護士さんの意見ですぐに、救急車で市内の病院へ運ぶということになったが、私は嘔吐とめまいでとても動けるような状態ではなかった。看護士さんが注射をするという。なんの注射かわからなかったので、わたしはひとまず断った。しかし看護士さんは、「これは病院からの指示だ」というので、私はそれをしぶしぶ受け、担架に乗せられて宿舎を出た。Ｗさんと通訳のＫくんに付き添われ、救急車で市内中心部の病院に向かうことになった。不思議なことにそのとき、めまいで眼はまったく開けず、体は注射のせいか動かすことができなかったが、耳だけはよく聞こえた。日本人駐在責任者のＮさんの、「Ｋくん、オーナーを頼む」という声が、今でも印象に残っている。

工場から病院までは、渋滞がなければ車で、1時間ほどで行ける。それを救急車で走るのだから、私はすぐに着くだろうと思っていた。ところがその日は、大渋滞で病院に着くまでに、4時間かかった。その間、私は救急車の中でずっと眠っていた。きっと看護士さんの注射が効いたのだろう。しかし後にわかったことだが、この4時間が致命傷となった可能性もあった。現在の日本ならば、脳梗塞は3時間以内ならば完治するという。たとえば元巨人の長島監督は発症から5時間以上かかったため後遺症が残ったが、サッカーのオシム元監督は3時間以内だったので、今ではまったく通常人と変わらないという。もちろんバングラデシュでも速い方がよく、1時間以内ならば打つ手があったらしい。

救急車の中で、私はＷさんの携帯電話で、香港のわが息子に電話で何かを指示したが、その内容はしっかり覚えていない。後日、わが息子に私が何を話したのか聞いてみたが、「オヤジの言葉は、ろれつが回らず、意味がわからなかった」とだけ答えてくれた。

病院では患者の私を、ブイヤンさんやジュンくんたちが待ち受けてくれていた。相変わらず耳だけはよく聞こえ、ブイヤンさんの奥さんがブイヤンさんに、「通訳はＫくんではだめなので、あなたがやって」と話した声を、今でも覚えている。私はただちに集中治療室に入れられ、ドクターの問診や触診の後、脳 CT や胸部レントゲンを受けた。このときの血圧は180／90。その集中治療室で、日本人の医師らしき人が私の症状をテキパキと診てくれて、「私はＳという者で、当病院の関係者ではありませんが、日本で医療業務に携わっていました。今回、小島さんの対応をするようにと上司から指示がありましたので、病院側とのパイプ役をやらせてもらいます」と話してくださった。私は病院での言葉の問題を心配していたので、ほっとした。その後、Sさんから、「まだ病気の診断ができていません。ひとまず高血圧、メヌエル氏病、脳梗塞、ウィルス性脳炎などを疑い、検査を行い、その後消去法で病気を特定する予定です。今のところ、メヌエル氏病の疑いが強いです」という治療方針の説明があった。そして「明日には息子さんが見えるそうですから、がんばってください」と言われた。それを聞いて私は、心の中で、「わが息子が来ても、病気が治るわけでもなく、あまりあてにならないのだが」と思った。なお入院中、Ｓさんにはたいへんお世話になった。この場を借りて、お礼をのべさせていただく。

翌日、頭部血管 CT 造影検査の結果、左小脳梗塞が抽出され、脳 MRI でも左小脳半球に梗塞を示唆する所見があった。その結果、病名が小脳梗塞と断定され、その他の検査は行わないこととなり、小脳梗塞の治療を行うことになった。その日の午後7時ごろ、なぜか突然、意識が消失した。頭のてっぺんから、だんだん暗くなり、看護士さんに助けを求める時間もなく、私はそのままベッドの上で失神した。そのときの血圧は76／30。30分後、意識は戻ったが、失神の原因についての説明は、病院からもＳさんからもなく、いまだにわからないままである。

その後、数日間、両腕に点滴が続き、体を動かすことができなかったので、腰が痛かった。それでも医師や看護士はやさしく、言葉が不自由でも困ったことはほとんどなかった。ただし食事とトイレだけにはいささか戸惑った。日本でも病院食はあまり美味しいものではないが、ベンガル病院食は私の口にはまったく合わなかった。普段、あまり食事のことでは文句を言わない私だが、さすがにこのときだけは、Ｓさんに不平を漏らした。すると翌日、Ｓさんが奥さんの手作りだと言って、おにぎりを持ってきてくださった。本当に美味しかった。またその後、ブイヤンさんの奥さんからも、美

味しい日本料理を届けていただいた。

お腹が満足し、体が回復してくるに従って、今度はトイレに行きたくなってきた。まだ点滴は外せず、ベッドから出ることができなかったので、バングラデシュ人の可愛い女性看護士さんに、恥ずかしかったが、身振りでトイレに行きたいと伝えた。するとすぐに、男性の看護士が尿瓶を持ってやってきて、事務的に処理してくれた。ただ、そのとき、その男性看護士が私のものを、いかにも汚いものを持つような感じでつかみ、尿瓶に放り込んだので、気分はよくなかった。

11月5日、病状は順調に回復し、嘔吐感もなくなり、めまいもしなくなった。ただしSさんから主治医の話として、「小脳梗塞が再度発生する可能性はある。その場合はバングラデシュの今の医療技術では処置ができないので、より環境が整った日本での治療を勧める。3～4日間、様子を見て11月10日ごろ、日本への移動をしたらどうか」との説明を受けた。また S さんもそれを勧めてくださった。その後、私は集中治療室を出て、一般病棟の個室に入った。やっと窓の外の綺麗な景色を見て、見舞客と会うことができるようになった。ダッカ工場の日本人も全員そろってお見舞いに来てくれ、N さんが、「工場は現在、出勤率98．5％であり、順調です」と報告してくれた。わが息子の言っていた通り、11月3日の午後、ほぼ全従業員さんが出勤したという。

11月13日、私はわが息子に付き添われ、日本に帰国することになった。担架に乗せられたまま、飛行機内に運ばれ、出国手続きなどはまったくしなかった。なぜかそのことが心配だったので、飛行機内でわが息子に、パスポートに出国のハンコが押してあるかどうかを調べさせた。息子は面倒くさそうな顔をしながらも、パラパラとパスポートをめくり、OK だと返事してくれた。私はそれを確認し、そのまま眠ってしまった。数時間後、目が覚めたので、かたわらのわが息子を見てみると、グウグウと眠っていた。その寝顔を見ながら、「とうとうオレも息子の世話になるハメになったか」と思った。

愛知県小牧空港に着き、ただちに岐阜大学病院の脳神経外科に入院した。すぐに最新の機器で検査を行った。そして主治医の先生から、「小脳梗塞はすでに固まっています。現在では、なんとも手の打ちようがありません。発症してから3時間以内ならば、外科的治療で完治できますが、今では手遅れです。幸い、その場所が後遺障害の少ないところであり、すぐにバイパスができており、生活に不自由はないと思います。経過は良好であり、17日には退院可能です」との説明があった。また「ただし血液をサラサラにする薬を飲むこと。また糖尿病対策を行うことが必要です」と宣告された。

退院後、わが社の幹部が私に、「オーナーは、自分の死でもって、息子さんに経営者としての自立を促された」と話してくれた。わが息子が、「これでオヤジも終わりか。オレがやらねば」と思ったかどうかは本人の口から聞いたわけではないのでわからないが、ダッカからわが息子の付き添いで帰国した時点で、父子の立場が逆転したことは確かである。

まだまだ私はやる気満々だが、これからは何ごとに付け、常に死を前提にして行動せねばならないということだけは、今回の一件で、私も強く自覚できた。つまり何ごとをやるにも、中途半端で終わり、わが息子に尻ぬぐいさせる結果になるということを想定せざるを得ず、その意味では父子の勢力逆転を認めざるを得ない状態になったということである。それでも私は、まだまだやらなければならないことがある。このままで死ぬわけにはいかないと思う今日ではある。

その後半年ほど、私は糖尿病との戦いに専念することになった。自分の体のことだけで精一杯となり、まったく工場のことなど考える余裕はなかった。糖尿病専門医の門をたたき、いろいろな人に話を聞き、たくさんの本を読んだ。そして食事・運動療法を徹底して行い、半年後、体重は 6kg 減、糖尿病の目安である HA1c を5．8まで下げることに成功し、血圧は常時120／70ほどに落ち着かせることができるようになった。

こうなると、俄然、工場のことが気になり、血が騒ぎ始めた。

以上

****

ベトナム縫製工場視察　雑記

20. NOV. 13

中小企業家同友会アジア情報センター代表
東アジアセンター外部研究員（協力会副会長）
小島正憲

昨今、世界の労働集約型企業は、中国から撤退し、東南アジアに向かっている。それらの企業が、まず目指す国はベトナムとインドネシアである。ベトナムとインドネシアは、バングラデシュやミャンマー、カンボジア、ラオスという低賃金国よりも賃金は高いが、外資の受け入れ環境が整っていると見られているからである。両国のうち、インドネシアの縫製工場については、先月、視察雑記をまとめ、その概要を報告した。今回、私はベトナムのホーチミン・フエ・ビンなどの地の縫製工場を視察した。以下に、ベトナムの一般情勢と視察雑記を記す。

《　ベトナムの一般情勢　》

1. 企業の3分の2が赤字＝財務省副大臣が会議で報告

10／30、ハノイで開かれた会議で、ベトナム財務省のドー・ホアン・アイン副大臣は、「今年、45万国内企業の3分の2が損失を計上した。非常に高率であるが、実は昨年の69％よりは低い」、と語った。政府が刺激策導入、支援プログラム策定、手続き簡素化などの努力をしているにもかかわらず、損失計上企業の数は、若干減ったとはいえ、まだかなり多い。

2. 全土で頻発する労働争議

①ゲアン省の韓国企業で1000人がスト

8／06、ベトナム北部ゲアン省ギーロック県のナムカム工業団地内の BSE 電子（100％韓国資本）の工場で、労働時間や賃金をめぐってストライキが発生。8日に収拾するまで1000人近くが職場を離れた。

②バクリュウ省の衣料工場で500人がスト

9／11、ベトナム・南部バクリュウ省ザーライ県ザーライ町のアンフン衣料工場で、約500人の労働者が出来高制賃金への切り替えをめぐってストに入った。 労働者側によると、同日朝に先月の賃金が支払われたが、8月は残業や休日出勤が多かったにもかかわらず、賃金の減った従業員が多かった。会社側は、8月から賃金体系が時間給から出来高給に変わった、この変更は6月時点から通知してきたと説明。しかし、労働者側は口頭説明では不十分で、実際にどのような基準で賃金が計算されるのかも示されず、賃金増減が予測できなかったと主張している。

③クアンナム省のスペイン系工場で労働争議

9／11、ベトナム中部クアンナム省のズイスイエン県のケットドアン社（スペイン資本）の工場で、約100人の労働者が、遅滞賃金、病欠制度や残業代の明確化など6項目の要求を掲げてストライキを行った。県労働組合など調停団が入り、会社側と交渉。労働組合の設立、労働者の労働法学習会設定などを含む合意書に労使双方が署名し、労働者は翌日から職場復帰した。

④ホーチミン市の韓国系衣料工場で労働争議

9／12、ホーチミン市ホックモン県のキュンスンビナ社（100％韓国資本）の衣料工場で、約100人の労働者が給料未払いなどを地方当局に訴えた。未払い賃金は5億ドンに達するとされ、ジュン・ウー・ヤング社長は行方不明。県労働組合は地方当局に会社資産の拡散防止を要請した。

⑤タイグエン省のテント製造工場で労働争議

9／10、北部タイグエン省フールオン県のバンポー・ベトナム社のテント製造工場で、無断欠勤など労働態度を理由に第3工場の労働者310人全員が解雇された。労働者側は、生産調整で会社側から求められた休みと主張。12日に全員が出勤するなど混乱が続いている

⑥ハイフォン市の韓国系衣料工場で700人超がストライキ

10／12、北部ハイフォン市アンズオン県のチャンズエ工業団地にあるクリスタルウェッター・ベトナム（100％韓国資本）の衣料工場で労働争議があり、同日朝に700人超の労働者がストライキに入った。操業3カ月の新しい工場で、労働者の多くも見習い期間という。各種手当てを含めて300万ドン程度の低賃金と遅配、不衛生な昼食、経営幹部の暴言などが問題になり、洗浄部門の労働者7人が異動を命じられたのをきっかけにスト入りした。

⑦ビンズオン省の台湾系革靴工場で労働者2600人がスト

10／10、ベトナム南部ビンズオン省の革靴工場で、時間制賃金から出来高制賃金への移行をめぐり労働争議が発生した。14日現在、約2600人の労働者がストライキを行っている。同省トゥーダオモット市のフースアン社は100％台湾資本の革靴製造工場。10日午後、出来高制になった賃金を現金自動預払機（ATM）で確認した労働者の多くが大幅減額に気付き、仕事を放棄して会社側に是正を求めた。労働者側によると従業員3400人のうち2600人が減額され、月450万～500万ドンの給料が300万ドン程度になった者も多かった。

⑧ニンビン省の米系リーバイス工場で1000人超がスト

10／28、北部ニンビン省イェンカイン県のリーバイストラウス・ベトナム（リーバイス）工場で、1000人超の労働者が労働条件の改善を求めてストライキに入った。同社は100％米国出資のジーンズ生産企業で、従業員約1200人。28日朝、有給休暇、賃金、有害物質労働手当、昼食手当、衛生状態、安全などの労働条件をめぐり、約500人の労働者が正門前に集まりスト入り。午後からさらに約500人が加わり、午後5時現在、約1000人がピケを張っている。

10／30、3日間続いていたストライキが終結し、1000人超の労働者が職場に復帰した。省人民委員会が積極的に労使間の調停に入り、妥結にこぎ付けた。労働目標を見直すとともに新基準を導入する際は試行期間を置くこと、職場の汚染や乾燥を引き続き改善すること、国の祝日を含めて年14日の休日、などが合意された。

⑨タインホア省の衣類工場で数百人がスト

11／15、ベトナム北部タインホア省バンハーの「バンハー衣類」社で、数百人の労働者が賃上げや保険料の支払いを求めてストライキを行った。会社はここ数カ月、健康保険と社会保険を支払っておらず、また当初は月額基本給200万ドン、残業代込みで300万ドン支払っていたが、3カ月目に赤字を計上して賃下げに踏み切り、給料は残業代込みで月額190万ドン（約9000円）になったという。

3. 2014年の最低賃金、最大17％アップ

ベトナムの国家賃金評議会は、国内・外資企業の2014年最低賃金引き上げに関する政令改正案を政府に提出。最低賃金引き上げ率は、月給で15．2～17．0％となる。インフレ率が落ち着いたにもかかわらず、引き上げ幅が大きいため、労働集約型の製造業にとってコスト負担が大きくなると見られる。ベトナムでは、地域が4区分されており、その区分ごとにアップ率が違う。ハノイ・ホーチミンなどの主要都市周辺エリアである第1地域は、最低賃金が235万ドンから275万ドン（17％アップ）＝約131USドルに引き上げられる。第2地域は210万→245万（16．7％）、第3地域は180万→210万（16．7％）、第4地域は165万→190万（15．2％）＝約91USドル。なお、ベトナムでは2015年までに310万ドン（第1地域）まで最低賃金をアップするという目標を掲げている。

4. 急速に進む少子高齢化

最新の調査結果によれば、ベトナムでは、2011年現在、60歳以上の国民は860万人で全人口の約10％に当たる。65歳超は7％だ。こうした割合を持つ国は高齢化社会とみなされる。国連人口基金（UNFPA）関係者によれば、ベトナムはアジアで高齢化が最も急速に進んでいる国の一つだ。ベトナムは、将来、労働年齢人口が減少する中で高齢者の需要を満たすという難題を抱えることになる。

《 縫製工場　視察雑記 》

1. 縫製工場の実質平均賃金

今回、ホーチミン（第1地域）で2工場、フエ（第3地域）、ビン（第4地域）で各1工場の合計4工場を視察した。各工場の実質平均賃金（週48時間労働換算）は、ホーチミンの2工場＝250USドル、フエ＝200USドル、ビン＝180USドル。

2. 第1地域周辺では人手不足の兆し

ホーチミンやハノイ周辺の第1地域では、すでに人手不足の兆しが現れており、工場の近所に寮を建てなければ、十分には人手を確保できないという。工場ではさらなる賃金アップを迫られ、福祉面での充実も欠かせなくなってきている。したがって、第1地域で操業している労働集約型企業は、いずれも第2～4の地域に分工場を建設したり、そこに下請け工場を設定したりする努力をしている。なお、ベトナムの多くの工場では、労働者はバイク通勤がほとんどで、各工場にはそれぞれ広い駐輪場が儲けられている。

3. 縫製工場の労働者の勤務態度

各工場の労働者の勤務態度は良好であり、作業に対する集中力や協調性、向上意欲なども中国人にひけを取らない。幹部労働者も優秀で、統率力もある。

4. ベトナム人労働者の中国人技術者への拒否反応

今回、どの工場でも、中国人技術者の姿を見かけることはなかった。不思議に思っていたが、ある工場の日本人経営者が、「中国との領土問題があり、ベトナム人労働者が中国人を嫌っているので、他の国のように、中国人技術者の力を借りるというわけにはいかない。残念だが仕方がない」と話してくれたので、ようやく納得できた。

5. ダナン・フエ市内の様子

・フエ市はダナン空港から車で 2 時間。
・フエ市は観光都市でもあり、市内のホテルやレストランは外国人の使用にも十分である。
・フエ市の道路の舗装状況はかなり良く、中国の地方都市レベル。
・ダナン市は、ハノイやホーチミンと比べて、たいへん栄えていて、高層ビルも立ち並ぶ大都市。
・ダナン市からフエ市にかけて、海や湖もあり、南のリゾート地という感じ。
・服装も、みな裕福に見える。

6. ビン市の様子

・ベトナムではかなり田舎、ビルや高い建物は全く見当たらない。
・道路舗装状況は決して良いとは言えない。
・車の量はさほど多くない。ベトナム全体から見るとバイクの量も少なく自転車が多い。
・戸外にいる人の人数も多くはなかった。
・しかしビン市は、第4地域に指定されている割には、辺鄙な場所ではなく、ビン空港から1時間半で工場に着く。
・人手は十分、電力も停電なし、土地も安く、地元政府の支援もある。
・ただし外国人が宿泊できる環境のホテルはなく、レストランもない。

以上

****

上海街角インタビュー ⑦

社団法人大阪能率協会アジア・中国事業支援室副室長（海外委員）
順利包装集団董事（在上海）
福喜多技術士事務所所長
福喜多俊夫

「中国ビジネスの常識」は本当に常識か？

中国で仕事をするにあたって、中国通の先輩や中国ビジネスハウツウ本から多くの「中国ビジネスの常識」なるものを学んだ。“中国では部下の失敗は人前で叱ってはいけない”、“中国では賄賂は必要悪”、あるいは“政治や宗教の話は出来るだけしない方がよい”など、たくさんある。中国と関わりをもって 15 年以上、中国に住んで 10 年、そのあいだ多くの中国人ビジネスマンと付き合い、自社の工場長の従業員対応を観察し、また、自分の経験から、本に書かれている「中国ビジネスの常識」の中には、“これはちょっと違うのではないか”と考え直すことがいくつかあった。そこで、中国人総経理やビジネスマン、また若手公務員に意見を聞いて見た。今回話を聞いたのは私が日常的に接している人達で、私が雑談風に話を振ったことに対する反応をピックアップしたものである。

１．中国では部下の失敗は人前で叱ってはいけない

多くの中国ハウツウ本に中国人はメンツを大事にするから、部下が失敗や間違いを犯しても人前で叱らず、別室に呼んで注意するよう配慮しなければならない、と書いてある。私もそう信じて、人前では注意しないように気をつけていた。しかし、あるとき自社の華東地区総経理のやり方を見ていて疑問を持った。我社の総経理は部下が失敗をすれば、それを全員の前でオープンにして叱り、会社に損失を与えた場合は罰則まで与えている。従業員はそれに恨みを抱くような様子は感じられない。これは我社の総経理だけかと思って、懇意にしている中国人総経理数人にこのことを確認したところ、“えこひいきさえしなければ人前で叱っても全然問題ない、むしろ日本人は中国人のメンツを気にしすぎて遠慮しているから、かえってなめられているのだよ”と言われてしまった。

どうやら日本人は“中国人のメンツを慮るあまり、部下を増長させている”可能性があるようだ。最近では、公平性に注意しながら、部下の失敗は人前であろうがその場で注意し、自分の失敗を自覚してもら

うことに重きを置いている。ただ、中国人の「メンツ」は日本人の「メンツ」と若干ニュアンスが異なるところがあるので、「他より優位な立場にいる」という意味での「メンツ」を人前で潰すと恨みを買うことがあるので要注意だと言われた。（日系企業の中国人総経理）

また、褒めるべきことを人前でしていないことも日本人の欠陥だと思う。公平・公正に部下を見ているのであれば、それを発見したらその場で、叱り、褒めるべきだ。

２．中国では政治や宗教の話はしない方がよい

これも多くの本に書いてある。私もこれはある面その通りだと思う。しかし、私の経験から言えば、避けていても政治や戦争や宗教の話題に立ち向かわねばならないときがある。そのような場合に逃げるのはよくないと思う。政治の話では“共産党の正統性に関わる話”は公衆の場では絶対に避けるべきだが、政府の経済施策についてはかなり自由な議論が出来るし、戦争の話題についても、中国と日本の第二次世界大戦における立場の違い（中国は日本とのみ戦争をした。日本は中国に対しては加害者であるが、一方では米国からは無差別爆撃を受けた被害者でもある）を説明する姿勢が必要だと思う。宗教の話は、中国は一応信教の自由は認められている（共産党は無宗教）。中国人に信者の多い仏教もキリスト教や回教と違って絶対神をもたない宗教だが（儒教は儒学であって宗教ではないと捉えられている）、日本は八百万の神がいる多神教の国であることを説明する程度のことは必要だと思う。いずれにしても、お互いが否定しあうのではなく、立場をきちんと話す姿勢が大事。

日系企業に勤めている中国人スタッフは日本人に気をつかっているのか戦争の話には触れたがらない傾向にあるようだ。（複数の日系企業総経理が同じ感想を述べていた）

これについて中国人の友人は「中国人は文化大革命で人間不信に陥った。お互いに警戒心をもって生きてきた。中国人は政治と宗教について語りたくないのではなく、語るのが怖いのです」と語っていた。

３．中国は人治主義の国、契約意識が乏しい

上に法あれば、下に方策あり、といわれる国だから、これもある面正しいが、中国の法律はいいかげんだとなめてかかっては間違いが起きる。中国の法体系はかなり整備されてきている。中国で仕事をしていると、取引先と家族ぐるみの付き合いをするほど親しくなり、取引にあたって契約を交わす際も、中小企業の場合はお互いの信頼関係で簡単な契約で済ませることになりがちだが、揉め事は信頼関係が崩れた時に起きるものだから、その段階では口約束は通用しない、契約書だけが最後の砦となる。いいかげんな契約書を交わしていると、相手は契約書の不備を徹底的に突いてくる。簡単な契約だと思っても顧問弁護士に細部を確認してもらうことが必要だ。セミナーでお世話になっている中国人弁護士の方は、「日本人は人がよすぎる」という。日本人は中国人の「関係」（グアンシー）についての考え方をもっと学ぶべきだ。「関係」（グアンシー）とは中国人が人と人との関係を、自己人（ツーチーレン。身内の関係）、「熟人」（シューレン。友人）、「外人」（ワイレン。他人）に分けて接することを言うが、ビジネスの場でも、一般社会生活でも結構成立している。

契約について、前出の中国人の友人は「斉之以法、民勉而無恥」（法律で民を管理してしまうと、国民は法律から逃げまくって、恥知らずとなる）という言葉を教えてくれた。
彼の言では“契約を守る意識で自分の行動を規範するのはレベルが低い”、古代中国は「信」がすべて。「約束」は遥かに「契約」を超えているものであり、約束を守れない人に対して「契約」をするのは、あまり意味がない。契約を大事にしない人の裏背景は、「信」の無い人です。ということだった。こう言われると中国ビジネスはますます難しくなる。

（「関係」（グアンシー）については平沢健一・安藤雅旺著、「中国に入っては中国式交渉術に従え」日刊工業新聞社に詳しい）

４．中国にはイジメはない

ある本に、中国にはイジメはないと書いてあったが、私の観察では学校でも職場でもイジメは存在している。友人の子供（中学生）の話では、学校でのイジメは言葉のイジメが多いようだ。会社では上司によるパワハラ、意地悪などいっぱいある。日中合弁会社で経営権を中国側が握っている会社にひとりで出向された方は往々にして“情報疎外”イジメに遭うから要注意。

敬虔な仏教徒である 40 代の友人は「中国にイジメがあるのは、宗教を大事にせず、因と果の教育をしなくなったからだ。「業報」（因果応報）への恐怖心がなくなってしまった」とコメントした。

５．中国では賄賂は必要悪

これも、ある面その通りなのだが、何でもかんでも“中国では賄賂があたりまえ”と考えてしまうと間違いが起きる。営業担当が“客先がバックマージンを要求しているので、取引をするためには支払わざるを得ない”といってきた場合は、営業担当との間に闇取引は無いか疑う必要があるし、バックマージンを払ってまでやる取引か考える必要がある。日系企業が相手の場合、購買担当者の言うがままにバックマージンを払っていて、先方社内で公になり以降取引停止になった会社もある。地方政府の役人との交渉の場合も、若い役人の中には国際感覚豊かで是々非々の対応を好む人も増えているので、中国は賄賂社会という一方的な思い込みはビジネスの社会では慎むべきだと思う。私の友人の娘さんは上海税関に勤務しているが、小さな賄賂で出世を棒に振るような危険は犯さないと言っている。

６．中国では酒が飲めないとダメ

一昔前の中国では“酒が飲めないのは男じゃない”という風潮があった。私はコップ半分のビールでも真っ赤になるほど酒に弱く、米国では昼間にお酒で赤い顔をしている人は“レッドネック”といって蔑まれたので、米国で仕事をしていた時は親しい友人とのプライベートな席以外ではお酒は飲まないようにしていた。中国では酒席は大事なビジネスの場と言われ、中国ビジネスに携わった当初は無理して付き合っていた。しかし、中国も変化している。北部では今でもアルコール度の高い白酒での乾杯の習慣が残っているが、東部、南部ではビール、葡萄酒が増え、お酒の弱い人には無理強いしなくなっている。

私も最近は、最初の乾杯の時だけ、ビールを口につけるが、以降は杯を伏せて、酒を受け付けない体質だといって誰の杯も受けないことにしている。　中国でも酒の席で“随意”が普通になってきた。お酒の飲めない人は無理をして体を壊さないようにしたほうがよい。

ただ、北方ではお酒が飲めた方が親しくなりやすいのは確かなようで、私の中国人の友人には酒が飲めないと北方ビジネスではハンディになると言われた。ただし、日本人は大きな誤解をしていると教えてくれた。「中国人にとってお酒は今も昔も人間関係の潤滑油であるとともに、人柄を測る道具でもある。同じ連中とめちゃくちゃ飲んで、酔っ払うのは 3 回まで、3 回以降はかえってめちゃ飲みをしないように気を使う。付き合いだして 3 回くらいで相手の人柄を見抜き、付き合える相手かどうか判断するわけだ。日本人は中国人と付き合う時、いつも最初から最後まで大酒を飲まないといけないと思っているが大きな誤解だ」。

中国はどんどん変化している

中国ビジネスがはじめての人も、長く中国ビジネスに携わっていて中国を熟知していると自信のある人も、自分がこれまで常識と思っていたことが、様々な場面で覆されることが多くなっていると思う。中国はどんどん変化しており、今の中国は 10 年前の中国と違うということを深く理解しなければならない。たとえば力のあるビジネスマンの年代はどんどん若くなり、高学歴化、高収入化している。ビジネスギフトの選択にしても 10 年前の感覚はすでに通用しなくなっている。

しかし、本質的な部分で変わらないところもたくさんある。中国に住む醍醐味は、この急速に発展する国でどんどん変化していく部分と変わらない部分のギャップを観察する楽しさにある。

以上

****

【中国経済最新統計】

	①実質GDP増加率(%)	②工業付加価値増加率(%)	③消費財小売総額増加率(%)	④消費者物価指数上昇率(%)	⑤都市固定資産投資増加率(%)	⑥貿易収支(億ドル)	⑦輸出増加率(%)	⑧輸入増加率(%)	⑨外国直接投資件数の増加率(%)	⑩外国直接投資金額増加率(%)	⑪貨幣供給量増加率M2(%)	⑫人民元貸出残高増加率(%)
2005 年	**10.4**		**12.9**	**1.8**	**27.2**	**1020**	**28.4**	**17.6**	**0.8**	**▲0.5**	**17.6**	**9.3**
2006 年	**11.6**		**13.7**	**1.5**	**24.3**	**1775**	**27.2**	**19.9**	**▲5.7**	**4.5**	**15.7**	**15.7**
2007 年	**13.0**	**18.5**	**16.8**	**4.8**	**25.8**	**2618**	**25.7**	**20.8**	**▲8.7**	**18.7**	**16.7**	**16.1**
2008 年	**9.0**	**12.9**	**21.6**	**5.9**	**26.1**	**2955**	**17.2**	**18.5**	**▲27.4**	**23.6**	**17.8**	**15.9**
2009 年	**9.1**	**11.0**	**15.5**	**1.9**	**31.0**	**1961**	**▲15.9**	**▲11.3**	**▲14.9**	**▲16.9**	**27.6**	**31.7**
2010 年	**10.3**	**15.7**	**18.4**	**3.3**	**24.5**	**1831**	**31.3**	**38.7**	**16.9**	**17.4**	**19.7**	**19.8**
2011 年	**9.2**											
10 月		13.2	17.2	5.5	34.1	170	15.8	29.1	-0.6	8.7	16.7	14.1
11 月		12.4	17.3	4.2	21.4	145	13.8	22.6	-12.9	-9.8	16.2	14.0
12 月	8.9	12.8	18.1	4.1	5.7	165	13.3	12.1	-15.4	-12.7	17.3	14.3
2012 年												
1 月				4.5	25.3	273	-0.5	-15.0	4.6	10.8	16.6	14.8

2 月		21.3		3.2	―	-315	18.3	40.3	38.7	-0.9	17.8	15.0
3 月	8.1	11.9	15.2	3.6	21.1	53	8.8	5.4	-6.5	-6.1	18.1	15.7
4 月		9.3	14.1	3.4	19.2	184	4.9	0.4	-26.1	-0.7	17,5	15.4
5 月		9.6	13.8	3.0	21.0	187	15.3	12.7	-6.1	0.0	17.9	15.7
6 月	7.6	9.5	13.7	2.2	21.8	317	11.3	6.3	-16.3	-6.9	18.5	16.0
7 月		9.2	13.1	1.8	20.6	251	1.0	5.7	-7.8	-8.6	18.9	16.0
8 月		8.9	13.2	2.0	19.4	267	2.7	-2.7	-12.7	-1.4	18.4	16.1
9 月	7.4	9.2	14.2	1.9	23.1	277	9.8	2.3	-6.4	-6.8	19.8	16.2
10 月		9.6	14.5	1.7	22.4	320	11.5	2.2	1.8	-0.2	14.6	15.9
11 月		10.1	14.9	2.0	20.0	196	2.8	-0.1	-8.7	-5.4	14.5	15.7
12 月	7.9	10.3	15.2	2.5	18.8	316	14.0	6.0	-7.8	-4.5	14.4	15.0
2013 年												
1 月				2.0	20.8	291	25.0	29.0	-12.4	-3.4	15.9	15.4
2 月				3.2		153	21.7	-14.9	-35.6	6.3	15.2	15.1
3 月	7.7	8.9	12.6	2.1	21.5	-9	10.0	14.2	-19.7	5.7	15.7	14.9
4 月		9.3	12.8	2.4	19.8	182	14.6	16.6	13.9	0.4	16.1	14.9
5 月		9.2	12.9	2.1	19.7	204	0.9	-0.1	-14.4	0.3	15.8	14.5
6 月	7.5	8.9	13.3	2.7	19.9	271	-3.3	-0.9	-17.3	20.1	14.0	14.1
7 月		9.7	13.2	2.7	20.2	178	5.1	10.8	1.2	24.1	14.5	14.3
8 月		10.4	13.4	2.6	21.4	285	7.1	7.1	-11.7	0.6	14.7	14.1
9 月	7.8	10.2	13.3	3.1	19.6	152	-0.4	7.4	-16.8	4.9	14.2	14.3
10 月		10.3	13.3	3.2	19.2	311	5.6	7.5	-8.2	1.2	14.3	14.1

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、１月と２月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、(　　)内の数字は１月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥―⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①―⑤は国家統計局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。